電氣新聞

物語で読み解くファイナンス入門

森平爽一郎 著

日本経済新聞出版社
1575円

本棚から一冊

評者 早稲田大学大学院教授
川本 裕子

「ファイナンス」「金融工学」「デリバティブ」「証券化」といった言葉は新聞紙上をにぎわし、経済の常識にもなりつつある。特にリーマンショックがこれらと関係付けられて語られる場合には、その犯人にされることも多い。金融事象は目に見えない。難解な数式をもってでしか説明も理解もできない、というイメージをもたれがちだ。だからこそ誤解もされやすく、本質がどこまで世の中で理解されているかは非常に心許ない。

本書はアメリカで学び日本の有数の大学・大学院で教鞭をとる、この世界の第一人者による入門書である。しかし数式は全くといっていいほど登場せず、豊富な経験に基づくエピソードによってファイナンスの本質が語られる。学生にファイナンス理論のおもしろさをわかってもらうための工夫が随所にあり、ユーモア精神にあふれた書きぶりは一般の人にも読みやすい。

たとえば金利の説明は「未来へのタイムマシンの乗車賃」で始まる。また、ハレー彗星の発見者のハレーは、金融工学を最初にうちたて、その偉大な功績は天文学や物理学にとどまらず、生命保険や年金を理論付けたことにもある、というエピソード。初心者にもファイナンスの世界が一気に近づくことは間違いない。ワイン投資に合理性があるか、といった章では思わず身を乗り出す読者も多いの

エピソードで本質を分かりやすく

ファイナンス理論の基本である「時間価値の考え方」が日本人の生活やビジネスの場に根づいていれば、バブルは起きなかったのではないか。投資に踏み切るには、投資成果の現在価値が投資の費用を上回っているときでないといけないのに、今の日本でこうした評価はしっかりなされているだろうか。こうした著者の問いかけは重い。ばなら、事業会社でも公共プロジェクトでも、こうした金融的概念がはっきりしていないと、費用はかかるが効果のはっきりしないプロジェクトの山になりかねないからだ。

これまで金融になじみが薄かった、金融はちょっと苦手、などと感じるビジネスマンにとってファイナンスの基礎知識を楽しみながら得られる絶好の書である。